革新主義時代における社会センター運動の興隆と衰退

― 校舎開放と参加民主主義の実験 ―

The Rise and Decline of the Social Center Movement in the Progressive Era:
An Experiment in Education for Democracy Through Wider Use of the School Plant

宮　本　健市郎 *

Abstract

This paper follows the trajectory of the social center movement in America during the first two decades of the 20th century. Edward J. Ward, a supervisor of social centers and playgrounds in Rochester, New York, was amongst the most influential protagonists of the movement and of the Social Center Association of America, established in 1911. Ward and his followers believed that democracy functions best when a diverse range of people are able to participate in different community activities: night school, public lectures, entertainment events, society meetings, civic occasions, public discussions, social dance parties, as well as other recreational pursuits. Hence, Ward favored bringing back the "little red schoolhouse" to tear down the walls that isolate people, and so reinvigorate participatory democracy. He championed the wider use of the public school plant, a common position among social reformers of the age, insisting that the school plant be used not only by children, but also by adults since it was supported by taxpayers' money.

In 1914, Clarence A. Perry completed a study of social centers in different cities, which showed that most of their activities were recreational, with few civic occasions, or public discussions of social problems. Perry's study challenged Ward's position of harnessing social centers to nurture participatory democracy, and it eventually lost traction with citizens and educators. In the late 1910s, the social center movement ended as an experiment in participatory democracy, and gave way to the community center movement for community organization. Perry became the leader of the new community center movement, arguing for the efficient use of the school plant, and focusing on community organization rather than on social centers as such. Ward conclusively lost his leading role in 1916, when the Social Center Association changed its name to Community Center Association.

キーワード：社会センター、社会センター協会、革新主義、校舎開放

はじめに：問題の所在

アメリカ合衆国では20世紀初頭の革新主義の時代に、「ある種の道徳心と市民としての純粋さを取り戻すこと」[1] が改革の主題となっていた。その中には、政治や経済の改革とともに、学校教育を改革して民主主義を普及させようとする思想と運動が含まれていた。デューイが『学校と社会』（1899）、『民主主義と教育』（1915）を発表して注目を集めたのは、それを象徴するものだった。このような動きに呼応して、住民が公立学校の校舎を利用して、夜間の成人教育、地域住民向けの講演会、住民集会、英語学習、スポーツクラブや芸術クラブ、リクリエーション活動などの事業が、大都市の一部の学区や、都市周辺の町で広がった。これらの事業は、1900年代から1910年代にかけて、全国各地に広がり、社会センター、コミュニティ・センター、近隣センター、学校センターなどと呼ばれていた[2]。名称がいくつかあることが示唆しているとおり、これらの事業のすべてが明確な理念をもって進められたとは言い難い。しかし、公立学校の校舎を住民が利用することを起点にしているということでは、全体を一つの運

* Kenichiro MIYAMOTO　教育学部教授

動として捉えることが可能であり、住民参加の民主主義の実験としてみることができる[3]。本稿は、これを「社会センター運動」ととらえ、この運動が盛り上がった1910年代前半までに焦点をあてて、その思想と実態を解明することを課題とする。

社会センター運動についての研究は少なくない。スティーヴンス（1972）は、NY州ロチェスターの事業を取り上げて、この運動が家族や近隣や国家への愛着を形成することにつながり、社会の安定と能率を上げることに貢献したとみる[4]。フィンファー（1974）は、社会センター運動をリクリエーション運動の一環としてとらえ、レジャーを通して住民によき市民性を教えようとしたが、ビジネスと結びつき、地域とは乖離したと指摘する[5]。リース（1986）は、ロチェスターの社会センター運動が道徳的な義憤にかられた革新主義者によるもので、古い田舎の民主主義の幻想を持ち続け、衰退したという[6]。佐々木豊（1991）は、スクール・ソーシャル・センター運動を、都市部に同質的コミュニティを再生させようとする都市改革の一環として捉えたうえで、「市民精神」「市民的紐帯」などを強調した点で、あまりに道徳的であり、楽観的であったと結論づけている。ジョンソン（1992）は、ロチェスターの運動を指導したウォードに焦点をあてて、社会センター運動がリクリエーション運動と合体したことを論証した[7]。マットソン（1998）は、社会センター運動が住民参加の民主主義を実現しようとした運動であったが、第一次世界大戦の時期には地域住民に国家への忠誠や同調を求めたと指摘している[8]。

ロチェスターの事業に絞って、成人教育または大学教育の拡張という視点から分析した研究として、赤木恒雄（1996）と五島敦子（2008）がある。赤木は、ロチェスターの事業をかなり詳細に紹介して、公立学校成人教育の原型として高く評価した[9]。五島は、ウィスコンシン大学拡張部による地域連携事業の一環であるコミュニティ・インスティテュートを取り上げ、ロチェスターで始まった社会センター運動の理念が、大学と社会との連携に継承されたことを論証している[10]。いずれもロチェスターの事業が現代の成人教育や大学拡張講座に継承されていることを示唆するものだが、1920年代以後の変質と展開についての言及はない。以上のすべての研究に共通していることは、革新主義の終焉とともに「社会センター運動」が終息したという枠組みに基づいていることである。

それでは、社会センター運動は、1920年代以後、どうなったのだろうか。たしかに、1910年代に盛り上がった社会改革（革新主義）が1920年以後に急速に衰退したことは、アメリカ史研究のなかでしばしば指摘されてきた。だが、社会センター協会は、コミュニティ・センター協会に名称を変えたものの、1920年代にも継続していたし、校舎を地域に開放しようとする事業も各地で続いていた。学校教育に目を向けると、1919年に進歩主義教育協会が結成され、その後、進歩主義教育が公立学校にも広がっていった[11]。そうであれば、社会センター運動は革新主義時代の社会改革の一環として始まり、1920年代以後に進歩主義教育が流行する中で変貌していったと考えることができるのではないだろうか。そこで、本稿は、社会センター運動が1910年代に終息したとみるのではなく、その間に運動の理念や方法が変化した背景と原因、変化の内容を解明することを課題として設定する。本稿は、この運動の起源から1910年代までに焦点を当てる。1920年代以後については次稿で検討する。

Ⅰ　社会センターの思想的起源

1．デューイの問題提起：地域の成人教育機関としての学校

社会センター運動が始まる契機となった論文が、デューイが『初等学校教師』に発表した「社会センターとしての学校」（1902）である。その中で、デューイは、学校が社会センターにならなければならない理由を四つあげている。第一は、現代社会では人間の知的・社会的な交流を進めるために、学校がその場所と機会を提供しなければならないからである。とくに、移民のように出身国から離れたが、まだアメリカ社会に馴染んでいない人々を市民にしていかなければならなかったのである。第二に、家庭や教会が持っていた教育機能が低下して、社会の規律や統制が緩んでいるので、それに代わる教育が必要だからである。そのような教育の仕事は子どもだけを対象にする学校に限定されてはならず、年長者に対しても必要だし、学校以外の方法も必要になっていた。第三に、学問と生活を関連づける必要があるからである。社会科学であれ、自然科学であれ、科学は急速に発展した。一方で、我々の生活は専門化が進み、労働は分業が進んだ。私たちは科学

を生活に応用しているのだから、学問と生活を意識的に関連づけなければならなくなっていたのである。第四に、経済や学問はいつも変化を続けているので、学校教育を終えたあとも、私たちは継続して学び続けることが必要だからである。学校は年齢にかかわらず、コミュニティのすべての人に対して継続教育を提供するセンターにならなければならなかった[12]。

以上の問題認識に基づいて、デューイは社会センターとしての学校が取り組むべき三つの課題を提示した。第一に、人間の相互交流を進めることである。単に形式的な討論が行われるだけでなく、個人の生活が尊重されつついろいろな考え方が身につくように、学校が、カースト制度や階層や民族や諸経験の間にある障壁をなくして、お互いが本当に共生（communion）できるような場所になることを期待した。第二に、学校がリクリエーションの場所となることである。リクリエーションには倫理的な意義がないと考えるのは誤りであって、リクリエーションの中にこそ、道徳的な力があると指摘している。第三に、専門的な知識や技術を学習する機会を、子どもだけでなく大人にも提供することである[13]。

デューイが構想する社会センターとしての学校は、子どもだけでなく、大人を含む地域住民を教育の対象とするものであり、リクリエーションも含み、学校教育の理念や内容を拡大するものであった。学校の校舎使用を生徒に限定せず、成人を含む一般民衆にも広げようとする動きを促進することにもなった。

2．公立学校校舎の民衆への開放

デューイが先の論文を発表して３年後、同じく雑誌『初等学校教師』に、「社会センターとしての公立学校」（1905）という論文が掲載されている。著者のウェストンは、公立学校は貧富や階層の違いに関係なく、すべてのひとが交流する場所であるので、そこでこそ子どもの社会性が育つことを強調した。したがって、「それ（アメリカの公立学校）は、午前中は子どもと若者のものであり、午後には母親クラブや地域生活の中心であるべきであり、平日の夜には労働者する女性や男性のものであり、時間を調整しながら、本当の近隣センターになるべき」（傍点部の原文でイタリック体）[14] であった。そうすれば、「子どもの犯罪を防止する」[15] ことができるという。「繰り返すが、校舎はつねに民衆に奉仕すべきである。親はいろいろな結社を組織し、民衆が一体感をもって生きられるように協力し、子どもの成長する力を自然と引き出してゆくべき」[16] であった。社会センターとしての公立学校とは、校舎を民衆に開放することを意味していた。

実は、公立学校の校庭を子どもの遊び場として利用することは、19世紀末から始まっていた[17]が、20世紀になると、教育行政の能率化を求めた改革の一環として、公立学校は住民によって設置維持されているのだから、住民がその校舎を利用することは当然とする考え方が確実に広がりつつあった[18]。たとえば、デューイが『明日の学校』のなかで紹介したインディアナ州ゲーリー市では、公立学校の校舎が地域住民の学習やリクリエーションの場になるようなプラン（ゲーリー・プラン）が実施され、注目を集めていた[19]。ゲーリー・プランは社会センター運動のひとつとみることができる。

Ⅱ　ロチェスターの社会センター運動

1．校舎開放の開始

学校教育の機能を拡大させようとする主張は、その後、公立学校の校舎や校庭などを、住民の学習や討論やリクリエーションの場にしたり、選挙の際の投票所にしたりするという具体的な事業へと展開していき、社会センターと呼ばれるようになった。このような事業は、ニューヨーク市、バッファロー、ロチェスター（以上 NY 州）、シカゴ（IL 州）、ピッツバーグ（PA 州）、ゲーリー（IN 州）など各地で実施されたが、特に注目を集めたのがロチェスターの社会センターであった。

ロチェスターでは、1907年の２月15日に市内の11の民間団体（職業労働中央評議会、児童遊び場連盟、大学女子クラブ、アメリカ革命の娘たちなど）の代表が会議を開き、校舎開放委員会（School Extension Committee）を結成した。この委員会が教育委員会と協議を重ね、公立学校の校舎使用許可と事業に対する公費支援を依頼した。教育委員会委員長のフォーブズ（George M. Forbes）は事業に理解を示し、1907-08年に5000ドル、1908-09年度に１万ドル、1909-1910年度に２万ドルの公費による支援を実施することになった。1907年６月にウォード（Edward J. Ward, 1880-1943）がこの事業の監督者に採用されて、中心的な役割を果たし、1910年まで

社会センターの事業は順調に進展していった[20]。事業の舞台となった学校は、1年目は第14学校など数校だったが、2年目に16校、3年目に18校が開放された[21]。1909年には、社会センターに参加していた14の団体が、市民クラブ連盟（League of Civic Clubs）を結成して市外からも多くの見学者を招いて事業を紹介した。その中には、著名なジャーナリストであったリンカン・ステフェンスやニューヨーク州知事のヒューズなどもいて、ロチェスターの社会センターは他の都市のモデルとして称賛されるようになっていた[22]。

市民クラブ連盟が1909年に発行した報告書をみると、1908年に実施された事業は、男子クラブ、女子クラブ、成人クラブ、体操、図書館、住民一般集会などであった。クラブの中には体操クラブや芸術クラブのようなものもあるが、一般の人たちが自由に参加して討論をするようなものが多かった。例えば、1908年12月から、「次世代市民クラブ（Coming Civic Club）」の集会が第14学校で開かれている。このクラブは支持政党、宗教、階層などが異なっていても、お互いが知りあいになって、市全体の観点から話し合いに参加して、「少年と若者に自治の訓練をするための方法」であるところに価値があるとされた[23]。このクラブのエンブレムが**図1**である。市の片隅から出された意見を交流させて、市全体の問題として討論をしようとする意図を読みとることができる。「本クラブの目的はメンバーを共和国の市民にむけて訓練すること」[24] と宣言をしていたのである。**図2**は、1909年1月17日（日曜日）の午後に、第9学校で開かれた女性クラブの会合である。日曜日は校舎を使いやすいからである。学校の生徒は一人もおらず、全員が14歳を越えている。

参加者数は、1907年11月から1908年5月までに延べ25,002人、1908年11月から1909年4月まででは延べ55,768人であった[25]。事業は着実に成果をあげつつあった。なお、当時のロチェスターの人口は20万人程度であった。もちろん、公立学校の校舎は、昼間は子どもが使うので、社会センターとして使用できるのは休日と夜間および夏休みなどということに

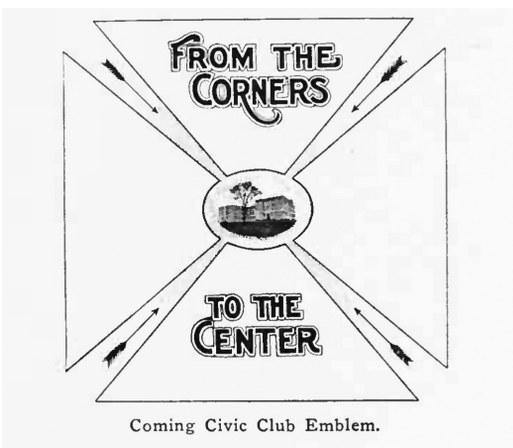

図1　次世代市民クラブのエンブレム
出典：The League of Civic Clubs, *Rochester Social Centers and Civic Clubs*, p. 70.

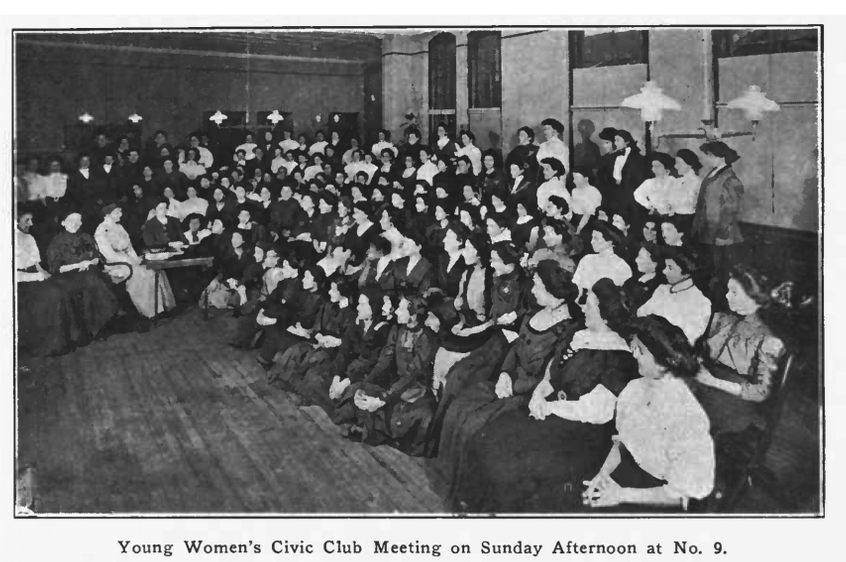

図2　日曜日の午後に開催された女性クラブ
出典：The League of Civic Clubs, *Rochester Social Centers and Civic Clubs*, p. 73.

なる。したがって、**図 3** のような掲示がだされていた。

市民クラブは特定の宗派や政党の利害を代弁するのではなくて、できるだけ異なる考え方の人々が参加して討論することを理想としていた。**図 4** はその理念を図で示したものである。民主党、共和党、進歩党、社会党までを含んでおり、ひとりひとりの宗派も異なっていることが読みとれる。

2．社会センターの思想

ロチェスターの社会センターの事業がどのような理念を背景にしていたのか。その特徴を確認しておこう。第一に、社会センターの事業が、上からの恩恵ではなく、住民が主体となって進められたことであった。住民の要望から始まって、教育委員会がそれに協力して、市議会で公費支出が認められるという形であった。ゲーリー市やニューヨーク市は、教育委員会が中心となって学校開放を進めていた。これに対して、ロチェスター教育委員会の委員長であったフォーブズは、社会センターが上からの恩恵（paternal）として作られてはならず、民衆の友愛から（fraternal）作られることが肝要と主張した。彼は、「コミュニティ住民自らが奉仕する制度として、社会センターが基本的、友愛的、かつ協力的でなければならないという考え方を、非常に明確に打ちだした」[26] のである。

ウォードは、住民が主体的に政治に参加することが民主主義の基礎であるという。「よい市民とは、

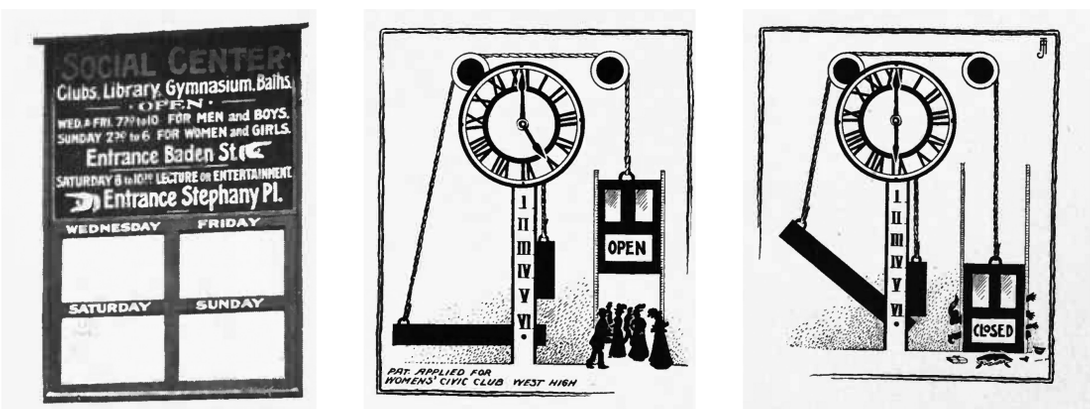

図 3　社会センターの開校時間を示す掲示

出典：The League of Civic Clubs, *Rochester Social Centers and Civic Clubs*, p. 62, p. 75

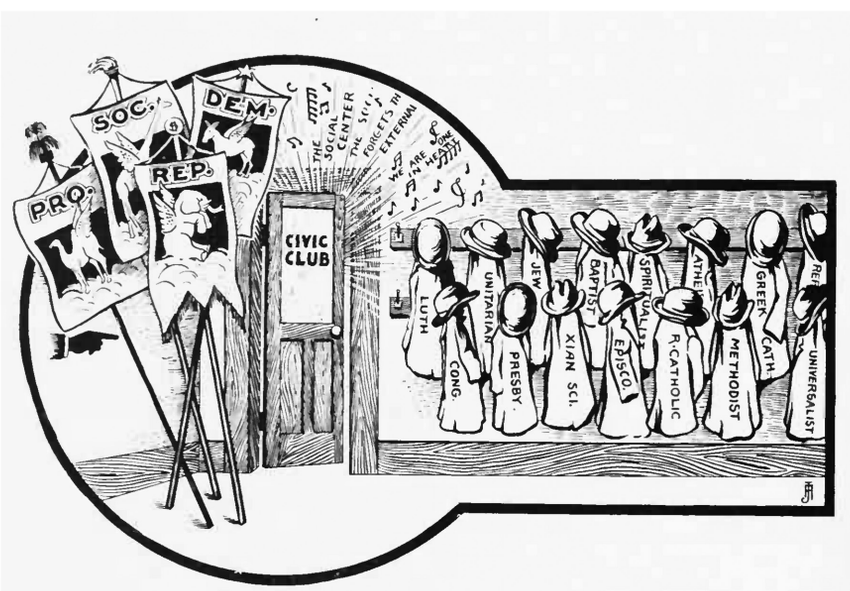

図 4　市民クラブの理念

出典：The League of Civic Clubs, *Rochester Social Centers and Civic Clubs*, p. 86.

たんなる従順ではない。民主主義社会においては、よき市民は、政府に従うだけではなく、統治者になることに参加する責任があると自覚している。校舎を市民センターとして利用すること、すなわち、市民参加の会議場、法律を制定する集会場、および最高裁判所法廷として校舎を使うことによってのみ、この住民共有の制度が、民主主義を明確に意識することを啓発していくというアメリカ人の偉大なる要望に応えることになる」[27]（傍点部分の原文はイタリック体）と主張した。

第二に、宗派や政治的立場が異なる人々が交流し、討論する機会を提供することで、校舎を、市民性を訓練するための場所にしようとしたことである。フォーブズは公立学校の校舎で政治討論をするのは自由であるべきで、そうしてこそ子どものための教育の場所になると主張した。「この運動（社会センター運動）はもっと大きな教育理念に従ったものだ。それは市民性訓練の手段としての学校を論理的に拡張したものといえる。……市民が自分たちの建物のなかで何を話そうが、だれもそれを規制する権利は持っていない」[28] のである。したがって、社会センターの実際の記録をみると、立場の異なる人の間でいろいろな議論が戦わされた。たとえば、1908年の大統領選挙の前には、10月１日は「なぜタフトに投票するか」、10月８日は「なぜチャフィンに投票するか」、10月15日は「なぜデブスに投票するか」、10月22日は「なぜブライアンに投票するか」、などがテーマとなっていた。その他、女性参政権、労働組合、映画の社会的価値なども取り上げられていた[29]。こうして、いろいろな人が集まりながらも、近隣の人たちは校舎を「家庭のように感ずる」[30] のである。

第三に、社会センターは「小さな赤い校舎を取り戻す」ことを目指していたことである。ウォードは「公立学校社会センターの本当の原型は、社会的セツルメントではなくて、かつてあった小さな赤い校舎であって、それは夕方には近隣の人たちが集まる場所だった」[31] という。「小さな赤い校舎」は、アメリカの民主主義が生まれたところの象徴である。1907年に教育委員会と校舎開放委員会の会議が持たれた際には、ウォードは次のように述べた。

> 社会センターはなんらかのすでにある制度に代わるものではない。貧しい人たちに奉仕するための慈善機関となるべきでもない。……それは、あらゆる制度のなかで最もアメリカ的なもの、すなわち公立学校センターを社会生活のなかで本当の位置に回復させることに過ぎない。そのねらいは、校舎を広く利用することによって、現代の複雑な生活の中に、私たちが都会で生活するようになる前に知っていたコミュニティにたいする関心、近隣精神、そして民主主義を発展させることである[32]。

ウォードは、校舎がかつて民主主義を実現するための場所であったという前提に立って、そこを、民主主義を学ぶための場所に戻すことをねらいとしていたのである。

以上をまとめれば、ロチェスターの社会センター運動は、民衆が自発的に始めたこと、自由な討論のなかでの主体的市民の訓練がねらいであったこと、そして、かつてアメリカに存在していたはずのよきコミュニティの復活が目的であったといえる。

3．社会センター運動の挫折

1909年まで順調に発展してきた社会センター運動は、ニューヨーク州知事から称賛され、全国の注目も集めていたにもかかわらず、1910年で打ち切りになった。その経緯は次のとおりである。1909年に市民クラブ連盟が結成されたとき、ウォードの思惑とは異なり、市長が連盟の代表に就かなかった。そのため、その後、共和党の政治家が市民クラブ連盟の事業にも介入するようになり、市議会で社会センターのための予算が大幅に削減された。1910年には関係者が無給で事業を続けた期間もあったが、結局、事業の継続は断念せざる得なくなった。1910年にウォードはロチェスターを去り、1911年に教育長が辞任し12年にフォーブズは教育委員会委員長を解任された[33]。ロチェスターの社会センターはここで終わったのである。

以上の経緯から、社会センターの事業が打ち切られたのは、現実の政治との葛藤にあったとみることができる。共和党の大物政治家で、ロチェスターではボスと呼ばれていたアルドリッジ（George W. Aldridge）は社会センター事業に熱心な教育委員をやめさせている[34]。公立学校で政治討論をするということが、政治家や民衆の間にも強い反発を生んでいたと考えられる。政治的な抗争のなかで、社会セ

ンターの事業が切り捨てられたのである。

Ⅲ　社会センター運動の広がり

1．市民社会センター全国会議の開催

ウォードは1910年の秋に、失意のうちにロチェスターを去ったが、社会センター運動は「燎原の火の如く」[35] 各地に広がりつつあった。ウォードはすぐにウィスコンシン大学拡張部に設置された社会センター開発局主事に着任し、新たな活躍の場を得ていた。ウォードからみると、「民主主義の充実した内容はロチェスターの人にとっては消化しきれないほどのものだったけれども、ウィスコンシンやその他の進歩的な州では、健康的な食事のようなものになり始めていた」[36]。

社会センター運動の全国的な広がりを具体的に示したのは、1911年10月25日からウィスコンシン大学マディソン校で開催された第１回市民社会センター開発全国会議（The First National Conference on Civic and Social Center Development）であった。この会議で、フォーブズ（ロチェスター教育委員会委員長、ロチェスター大学教育学教授、ニューヨーク州教員協会代表）が演壇に立ち、ロチェスターでの経験を語った。彼は、「ロチェスターでの校舎開放運動は、ヒューズ（ニューヨーク州）知事が言っているとおり、民主主義の基盤を強化することを、はじめから意識して、慎重に、計画を立てた」と語ったあと、ロチェスターでの社会センター運動からの教訓を15点にわたって紹介した。要点をまとめると、第一に、社会センター運動が民主主義の基礎であること、第二に、ロチェスターではコミュニティの倫理的精神を開発していること、第三に、いろいろな考え方の大人が話しあって、議論をすることが重要であること、第四に、近隣の人々の自発的な結社が重要であること、第五に、健全なリクリエーションが発達し、少年非行の防止などに貢献できること、などであった。いずれも、「ロチェスターの最大の目的は、コミュニティ全体の倫理的精神を目覚めさせ、開発すること」[37] であったということばに集約することができる。

フォーブズの演説の前日に、社会センター運動を強力に援護する講演をしたのが、ウィルソン（Woodrow Wilson ニュージャージー州知事、1913年に大統領就任）であった。彼は、地域の人間が相互に交流することで共通感覚を育て、為政者に頼ることなく、住民が下から地域づくりに参加することを期待した。公立学校の校舎は地域住民のものなので、それを地域住民が自由に利用するのは当然であり、民主主義の柱になると考えた。したがって、ウィルソンは、校舎を基盤にしたロチェスターの社会センター運動を高く評価した。「このような運動の中で私が見出すことができるのは、アメリカ人民の建設的で創造的な天才が回復していることである。どこであれ、これらの校舎は、国民が多額の経費をかけたから存在しているもので、いつの日か、自由の木の大きな根となって、すべての人類の維持と保護のために広がっていくにちがいない」[38] と述べた。

この会議の大きな成果が、アメリカ社会センター協会（Social Center Association of America）の結成であった。ウォードはその事務局長（executive secretary）に就任し、全国的な指導者として、いろいろな雑誌に社会センター関連の記事を書き続けた。協会の綱領の第一条は以下のとおりであった。

> 社会センターは、利害関心を共有しているすべての人たちを代表する。それは話し合いの場所であって、市民性と近隣精神を習得するための恒久的な本部である。そこで、人々はお互いをよく知るようになり、自らの統治の方法を学ぶ。今や、公立学校の校舎はその一部である。現状では校舎のサービスは恩恵的である。社会センターは校舎を友愛的なものとしても機能させる。校舎を住民にどのように開放するかの詳細は地域が必要とするものによって異なるが、その精神はリンカンの精神である[39]。

ウォードは、綱領の内容を、「公立学校の校舎を地域住民が使用することをとおして知性的で公共的な精神の開発を促すこと、すなわち、公衆が疑問に思うことを自由に討議し、あらゆる健全で、公民らしく、教育的で、そしてリクリエーションの意味もある活動ができるようにすること」（傍点部の原文はイタリック体）とまとめている[40]。

学校を社会センターにしようとする運動は、住民が話し合いをする場所として校舎を開放し、そこを市民性教育の場所として確立しようとするところから始まった。20世紀初頭のアメリカでは、革新主義運動が高揚し、政治や経済の不正を糾弾したり、住

民の福祉をもとめたりする動きが盛り上がりつつあった。理想とする民主主義は、かつてアメリカに存在した「小さな赤い校舎」が象徴するような近隣の人々が自由に交流できる場所であり、親密な人間関係があるところであった。校舎開放の運動は直接民主主義をめざす政治改革の一環とみることができる[41]。

2．アメリカ遊び場運動とのつながり：民主主義と道徳教育

社会センター運動を積極的に支援した組織として、アメリカ遊び場協会（Playground Association of America）があった。時間をすこし遡るが、19世紀末からボストンやニューヨーク市、シカゴなどの大都会では、遊び場をなくした子どもに対して、遊び場を提供しようとする福祉活動が始まっていた。路上や教会に遊び場を設置したり、公園を新たに設けたりした例もあるが、20世紀になると公立学校の校庭を子どもの遊び場として利用する例が増えつつあった。いろいろな都市に発生した遊び場設置の運動をまとめるかたちで、1906年にルーサー・H・ギューリック（Luther H. Gulick、会長）、ヘンリー・S・カーティス（Henry S. Curtis、事務局長）、ジョセフ・リー（Joseph Lee、副会長）らが中心になって組織したものがアメリカ遊び場協会（PAA）であった[42]。この協会が結成されたとき、その綱領を作成し、指導的な役割を果たしていたのはカーティスであった。カーティスが作成した協会の憲章によると、「本協会の目的は、全国の遊び場についての情報と関心を集めて広めることである。また、本協会は、すべての地域に遊び場と運動競技場を普及させ、学校と連携して遊びを指導することに努める」[43]ことであった。公立学校の校庭を使って子どもに遊び場を提供する事業はすでに始まっていたが、PAA がこれをさらに推進することになったのである。つまり、PAA は学校施設を地域の人々に開放するという点では社会センターの先駆であった。

カーティスは遊び場と学校を一体のものとして捉え、教育委員会の管理下に置こうとした。「遊びがすべての子どもに必要とされ、子どもの社会的、道徳的な訓練のための主要な方法である限り、遊びを学習するコースは学校制度の一部になる」[44] べきであり、遊び場が公立学校の校舎に組み込まれることを期待した。彼によると、「学校児童の遊びは、学校の扱うべき課題であって、市のどのような部署もそれを満足のいく形で取扱うことはできない」[45] のだから、これらの公共の施設の管理を学校の校長先生が教育の一環として引き受けなければならない。校長にその能力があるかを懸念する声には、次のように答えている。「今のところ、平均的な校長はこの新しい場面までを管理する能力が十分でないのは確かだが、新しい責任を果たすことができるようになるのが普通だし、そうでなければあらたな校長がとって代わることになる」[46] と考えていた。

したがって、1911年に社会センター協会が結成されたとき、カーティスは、この運動がさらに広がっていくことに強い期待を表明した[47]。カーティスにとって、公立学校の校舎はコミュニティの中心にあって、民主主義の要になるべきものであった。現代の大都会では民衆が話し合う機会が少なくなったことで、民主主義が危機に直面していた。これに対処するためには、公立学校の校舎や校庭を民衆に開放し、同時に「コミュニティまたは地区を民主主義的にコントロールすること」[48] が必要であると主張したのである。具体的には、公立学校の運動場や図書館を、地域住民に開放し、日曜日や夏休みに、一般の人が利用できるようにしようとした。そうすることが、学校とコミュニティのつながりを強化することになると考えたからである。社会センター運動の目標は、「人々がお互いに話し合い、よく考え、討論し、公共の福祉を組織できるように、集会場（アゴラ）、公共広場（フォーラム）、市場、あるいは総合施設を、人民に提供すること」[49] であった。

カーティスは、コミュニティの中心にある学校が民衆の道徳心を形成すると考えた。かつてのニューイングランドでは、教会とタウン・ホールがコミュニティの中心であり、近隣住民をまとめる機能をもっていたが、都市化が進んだ現在では、その中心としての機能が失われつつあった。それに代わるものとして、公立学校の役割が重要になっているという。「学校はすでに、地理的にコミュニティの中心部にあり、近隣住民の関心の多くをひきつける中心でもある。学校の周囲にほかの公共施設を集中的に配置することで、学校を本当の中心にしようではないか」[50] と呼びかけた。ほかの公共施設とは図書館、市営の浴場や体育館、公衆が利用する劇場、運動場、小規模な公園などである。こうしてつくられた「近隣センターは『都市の混乱』を克服して、一

人一人の行動を道徳的なものにする」[51] のである。かつてアメリカに存在していたコミュニティの理念を思い起し、校舎を住民に開放することで、市民の道徳心を再生させようとしている点で、ウォードの思想と一致している[52]。カーティスが指導する遊び場運動は、社会センター運動の一部を構成していたのである。

3．社会センターの実態

「社会センター」で実際にどのような事業が行われていたがみてみよう。この事業が全国に広がりつつあったときから、その詳細な調査を行っていたのはラッセル・セイジ財団のクラレンス・A・ペリー（Clarence A. Perry）であった。ペリーは遊び場協会の会長であったギューリックらの推薦で1909年から同財団の研究員となり、ニューヨーク市にある遊び場や校舎の有効利用に関する研究と調査に従事していた[53]。彼が1914-15の状況を示したものが**表 1** である。それによると、社会センター事業の内容が、その効果の観点から、

①文化的効果（夜間学校、講義、コンサートなど）
②市民的効果（諸団体の話し合い、市民会議、民衆会議、公開討論）
③リクリエーションの効果（体操、競技、クラブ活動、集団活動、読書会、学習会）
④社交的効果（ダンス、パーティ、宴会など）

以上の四つに分類されている[54]。これらの事業のなかで、①と②が住民の政治参加を促す活動であり、市民性の形成の中心となると考えられる。③と④は、いずれもリクリエーションに含めてもよいであろう。

社会センターを実際に利用していた人数を示したのが**表 2** である[55]。圧倒的に多かったのは、体操や運動競技、社交ダンス、エンターテインメント、社交クラブなど、リクリエーション活動である。大人が参加する講義や討論や会合などもあるが、それほど多くはない。1914年頃においては、リクリーションが社会センターの活動の大部分であった。

ウォードが期待した社会センターは、公立学校をとおして住民が政治討論に参加したり、講演を聴くことで地域への関心を持ったりすることで、民主主義的なコミュニティのつながりを回復することをねらった。しかしながら、社会センターの事業の大部分は、実際にはリクリエーションが中心であった。

おわりに

社会センター運動は、公立学校の校舎を住民に開放して、住民が主体的に討論、講演会、リクリエーションなどに参加して、交流を深めることで、民主主義的なコミュニティを再生させることをねらいとしていた。その実験はその後どのように展開したであろうか。

本稿では十分には論じられなかったが、1910年代後半から、遊び場運動および社会センター運動が変貌しつつあったことは明確に指摘することができる。遊び場協会に着目すると、1910年に、ギューリックがアメリカ遊び場協会の会長を退き、ジョセフ・リーが会長に就任し、同時に、カーティスは協会の名誉第二副会長という奇妙な名称の地位に就いて、実質的には協会の主導的な地位を失った。同年

表 1　社会センターにおける活動の分類

Classes of Activities

Code letter	Activity	Dominant effect
NS	Night School	Cultural
L	Lectures	
E	Entertainments (concerts, etc.)	
SM	Society meetings (adults)	Civic
CM	Civic Occasions, mass meetings, public discussions	
A	Athletics, gymnastics, bathing, active games, or folk dancing	Recreational
C	Clubs (social, athletic, etc.) or groups (musical, handcraft, etc.)	
R	Rooms open for quiet games, reading, or study	
D	Dancing (social)	Social
S	Social occasions (parties, banquets, etc.)	

出典：Perry (1915), *The Significant School Extension Records: How to Secure Them, U. S. Bureau of Education, Bulletin*, 1915, No. 41, p. 14

表2　社会センターの利用者数

Estimated attendance at 16,492 group-occasions in 45 cities for March, 1914

Activities	Group occasions	Attendance estimated per occasion	Aggregate attendance
Athletics, gymnastics, bathing, active games, or folk dancing	5,504	35	192,640
Dancing (social)	999	150	149,850
Lectures	784	150	117,600
Entertainments (concerts, etc.)	539	200	107,800
Clubs (social, athletic, etc.) or group (musical, handcraft, etc.)	4,516	20	90,320
Rooms open for quiet games, reading, or study	3,165	25	79,125
Social occasions (parties, banquets, etc.)	217	250	54,250
Civic occasions, mass meetings, public discussions	233	150	34,950
Society meetings (adults)	535	40	21,400
Total	16,492	1,020	847,935

出典：Perry (1915) *The Extension of Public Education, U. S. Bureau of Education, Bulletin*, 1915, No. 28, p. 47.

に協会の憲章が改訂され、協会と学校との連携を記述した部分が削除された。1911年に協会は名称をアメリカ遊び場リクリエーション協会に変更し、さらに1930年には全国リクリエーション協会に変更した。すなわち、遊び場協会はリクリエーションを主要なねらいにするようになり、学校教育との連携を自ら絶ったのである。この間の事情は省略するが[56]、カーティスにとっては不本意なことであったに違いない[57]。遊び場運動は学校教育との関連を失い、遊び場協会はジョセフ・リーの指導のもとで、大人向けのリクリエーション活動の普及を主眼とするようになった。この動きは、社会センターの活動がリクリエーションに偏っていったことと連動していた可能性が高い。

1910年にロチェスターを去ったウォードは、ウィスコンシン大学の大学拡張部にいて、社会センターの普及のための活動を続けたのち、1916年に連邦教育局のコミュニティ組織部門（Division of Community Organization）主任に着任したが、その後アラスカに行き、社会センター運動の表舞台からは消え、協会との関係をほとんど持たなくなった[58]。アメリカ社会センター協会は、1916年に全国コミュニティ・センター協会（National Community Center Association）に名称を変更し[59]、1917年にはウォードに代わってペリーが全国コミュニティ・センター協会の主導権を握った[60]。公立学校の施設を住民に開放してそこを民主主義が生まれる場所にするという社会センター運動の当初の意図は薄れ、コミュニティ・センター運動は成人向けのリクリエーション活動が中心になっていた。

1920年代になると、ウォードもカーティスも、社会センター（コミュニティ・センター）運動からは遠ざかっていた。彼らの試みは挫折したとみるべきであろう。もしそうであれば、なぜなのか。実は、これこそが本研究の次の課題である。

本稿は科研『20世紀初頭米国のスクール・ソーシャルセンターにおける道徳教育としての市民性教育』（代表：佐藤隆之、2016-18年度、課題番号：16K04496）による研究成果の一部である。

注

1　Richard Hofstadter, *The Age of Reform : From Bryan to F. D. R.* New York: Alfred A. Knopf, 1977, p. 5.

2　筆者が文献を読んだ限りでは、1910年代前半までは social center が多く、10年代後半から community center が増えてくる。School center は20年代以後に多い。

3　佐々木は、「スクール・ソーシャル・センター」とかっこをつけて表記しているが、佐々木が引用している文献にはその用語法はほとんど出てこない。「社会センター」「コミュニティ・センター」「学校センター」の方が一般的であった。本稿では、用語の違いが運動の性格の変化を示唆している可能性があることに注意しつつ、行論を進めたい。佐々木豊「アメリカ都市『コミュニティ』の再生―革新主義時代における『スクール・ソーシャル・センター』運動」『史学』（三田史学会）第61巻（1991年12月）107-132頁

4　Edward W. Stevens, Jr., "Social Centers, Politics, and Social Efficiency in the Progressive Era," *History of Education Quarterly*, Vol. 12, No. 1 (Spring, 1972) pp. 16-33.

5　L. A. Finfer, "Leisure as Social Work in the Urban Community: The Progressive Recreation Movement, 1890-1920," Ph. D. diss., Michigan State University, 1974.

6 William J. Reese, *Power and the Promise of School Reform: Grass-root movements during the Progressive era*, (Boston: Routledge & Kega Paul, 1986), pp. 177-208.
7 Ronald N. Johnson, "Forgotten Reformer: Edward J. Ward and the Community Center Movement, 1907-1921," *Mid-America: An Historical Review*, Vol. 74, No. 1, (Jan., 1992), pp. 17-35.
8 K. Mattson, *Creating a Democratic Public: The Struggle for Urban Participatory Democracy during the Progressive Era*, Pennsylvania University Press, 1998.
9 赤木恒雄「ロチェスター・ソーシャル・センター運動の展開と帰結」『倉敷芸術科学大学紀要』第１号、1996年、247-265頁。
10 五島敦子『アメリカの大学開放―ウィスコンシン大学拡張部の生成と展開―』（学術出版会、2008年）第５章
11 Lawrence A. Cremin, *The Transformation of the School: Progressivism in American Education, 1876-1957*, New York: Alfred A. Knoph, 1961.
12 Dewey, "The School as Social Center," *The Elementary School Teacher*, Vol. III, No. 2 (Oct., 1902), pp. 73-83.
13 Dewey, "The School as Social Center," pp. 84-86.
14 Weston, "The Public School as a Social Center," *The Elementary School Teacher*, Vol. 6 (Oct., 1905), p. 115.
15 Weston, "The Public School as a Social Center," p. 115.
16 Weston, "The Public School as a Social Center," p. 116.
17 遊び場については、拙稿「アメリカにおける遊び場運動の起源と展開」『教育学論究』（関西学院大学教育学会編）第６号、2014年で論じた。
18 Raymond Callahan, *Education and the Cult of Efficiency: A Study of the Social Forces That Have Shaped the Administration of the Public Schools*, Chicago: University of Chicago Press, 1962.
19 ゲーリー・プランについては、宮本健市郎「アメリカ進歩主義教育運動におけるコミュニティと学校―1910年代のゲーリースクールの研究―」『東京大学教育学部紀要』第23巻（1983）、275-285頁参照。
20 The League of Civic Clubs, *Rochester Social Centers and Civic Clubs: Story of the First Two Years*, published by the Civic Clubs, 1909
21 Ward, *The Social Center*, New York & London: D. Appleton and Co., 1913, pp. 175-206
22 Blake McKelvey, "Rochester' s Public Schools," *Rochester History*, Vol. 31, No. 2 (April, 1969), p. 13.
23 The League of Civic Clubs, *Rochester Social Centers and Civic Clubs*, p. 69
24 The League of Civic Clubs, *Rochester Social Centers and Civic Clubs*, p. 71
25 The League of Civic Clubs, *Rochester Social Centers and Civic Clubs*, p. 45, 116
26 Ward, *The Social Center*, p. 181.
27 Ward, "The Schoolhouse as the Civic and Social Center of the Community," *Addresses and Proceedings of the NEA, 1912*, p. 440.
28 Perry, *Wider Use of the School Plant*, New York: Charities Publication Committee, 1910, p. 274.
29 The League of Civic Clubs, *op. cit.* p. 87.
30 Ward, "The Schoolhouse as the Civic and Social Center of the Community," *Journal of Proceedings and Addresses of the NEA, 1912*, p. 436
31 Ward, "Little Red School House," *The Survey*, Vol. XXI, No. 19 (Aug. 7, 1909), p. 640.
32 Perry, *Wider Use of the School Plant*, pp. 272-273.
33 McKelvey, "Rochester's Public Schools," op. cit. pp. 12-13; anon.,"In Memoriam: George Mather Forbes," *Rochester Alumni Review*, Vol. XIII, No. 2 (Dec. 1934-Jan. 1935), p. 49.
34 McKelvey, "Rochester's Public Schools," p. 13.
35 "School Social Center and the Nation: How Idea is Spreading over Country, Fully 100 Communities Have Caught the Spirit of it Now and More Are Getting it Every-Day- Spreading to Country Schools in Texas," *The Detroit Times*, Oct., 23, 1911
36 Ward, *The Social Center*, p. 203.
37 George Mather Forbes, "Lessons Learned in Rochester with Reference to Civic and Social Center Development," *Bulletin of the University of Wisconsin, Extension Division*, Serial No. 464, General Series, No. 301, Nov., 1911.
38 Woodrow Wilson, "The Need of Citizenship Organization: A Lucid Analysis of the Civic and Social Center Movement — How it is Helping to Solve the Fundamental Problem of Modern Society," *American City*, Vol. 5, (Nov., 1911), p. 268.
39 "The Neighborhood Spirit and Training for Citizenship," *The Twin Falls Times* (Idaho), Dec. 1, 1911.
40 Ward, *The Social Center*, p. 206.
41 Mattson, Creating a Democratic Public (1998), William J. Reese, *Power and the Promise of School Reform: Grassroot movements during the Progressive Era*, Boston: Routledge & Kegan Paul, 1986.
42 詳細は、宮本健市郎「アメリカにおける遊び場運動の起源と展開―アメリカ遊び場協会の成立と変質―」『教育学論究』（関西学院大学教育学会編）第６号（2014），pp. 173-183.
43 "Constitution of the Playground Association of America," *The Playground*, No. 3 (June, 1907), Vol. I, p. 13.
44 Curtis, "Playground Progress and Tendencies of the Year," *Proceedings of the First Annual Congress of Playground Association of America, held on August 3, 1907*, p. 29.
45 Curtis, *Education through Play*, New York: Macmillan Co., 1915, p. viii.
46 Curtis, "The School Center," *The Survey* (April 19, 1913), p. 91.
47 Curtis, "The Rural Social Center," *American Journal of Sociology*, Vol. 19, No. 1 (July, 1913) p. 79.
48 Curtis, "The School Center," *The Survey*, Vol. 30, (April 19, 1913), pp. 89. なお、カーティスは、スクール・センターまたはスクール・ソーシャル・センターという用語をしばしば使っている。

49 Curtis, *Play and Recreation for the Open Country*, Boston: Ginn and Company, 1914, p. 198.
50 Curtis, "The Neighborhood Center: The School is Already the Geographical Center of the Community, and the Center of Much of the Neighborhood's Interest," *American City*, Vol. VII (July, 1912) p. 14.
51 Curtis, "The Neighborhood Center: The Proper Relationship of the Public School to Playground and Small Park," *American City*, Vol VII (Aug., 1912) p. 137.
52 Ward は成人教育に主眼があり、カーティスは学校教育を中心としながら成人教育も含んでいる。カーティスが道徳教育を多用しているのはそのせいと考えられるが、道徳教育と市民性教育を同一視することはできず、別の機会にあらためて検討してみたい。
53 John Glenn et al. *Russell Sage Foundation, 1907-1946*, New York: Russell Sage Foundation, Vol. I, 1947, pp. 72-73.
54 Perry, *Significant School Extension Records: How to Secure Them, U. S. Bureau of Education Bulletin*, 1915, No. 41.
55 Perry, *The Extension of Public Education, U. S. Bureau of Education Bulletin*, 1915, No. 28
56 この間のアメリカ遊び場協会の動向、およびジョセフ・リーの思想については、拙稿「ジョセフ・リーにおける慈善とリクリエーションの思想」関西学院大学教育学会編『教育学論究』第7号（2015および「ジョセフ・リーにおける『よい市民』形成の論理」『アメリカ教育研究』（アメリカ教育学会編）28号、2018年3月、55-73頁で考察した。
57 カーティスは第一次世界大戦中にフランスに駐在し、兵士の運動監督官をつとめ、帰国後ミズーリ州教育省の健康・体育局長を務めた。しかし遊び場リクリエーション協会では目立った活動はしていない。Carlton Yoshioka, "Henry Curtis," in Hilmi Ibrahim et al., *Pioneers in Leisure and Recreation*, American Alliance for Health, Physical Education, Recreation, and Dance: 1989, pp. 103-113.
58 ウォードは協会を去ったあと、アラスカやワシントン D. C. の小さな町で、校舎を社会センターとする実験を試みていた。"Most Visited School in U. S: Park View Organized on Plan of New England Village," *The Washington Herald*, June 13, 1920.
59 学校教育では community civics のような教科が出現していた。また、社会主義政党がつくられていて、ソーシャルという表現が大衆から忌避される傾向が生じていたと指摘する研究もある。Johnson, "Forgotten Reformer," op. cit. p. 28.
60 Ronald M. Johnson, "Forgotten Reformer," op. cit. p. 32-33.